

ASA 苫小牧・白老 ~心弾む暮らしをお手伝い~ 第16号  
てくてくタウン 7月

楽しみも生きがいも足元から。身近な街の情報を皆様のお手元にお届けします。  
●毎月1回月末朝刊折り込み ●朝日新聞苫小牧・白老店主会発行 ●ASAてくてくタウン製作室(ASA苫小牧系井内)

お気軽に情報をお寄せください。

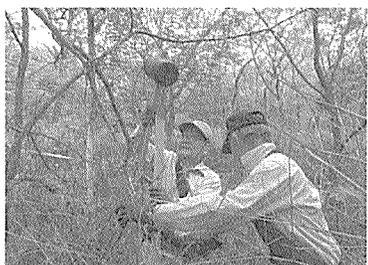
ASA 朝日新聞サービスアンカー

新生台明野/苫小牧市双葉町1丁目9-11 TEL 37-2676  
苫小牧系井/苫小牧市しらかば町1丁目5-18 TEL 73-1751  
錦岡/苫小牧市青雲町2丁目8-7 TEL 67-0423  
白老/白老郡白老町若草町1丁目13-25 TEL 82-3123

7月の朝日新聞休刊日は7日です

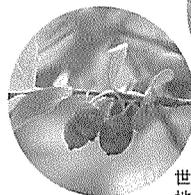
茶とクローズアップ  
(ハスカップ)編

甘酸っぱい実の収穫期に歴史と重要性を考える



▲NPO法人「苫東環境 commons」では、ハスカップの植生調査を実施。乾燥化によって入り込んだハンノキなどが群落となり、気がかりだ

ハスカップは6月に  
薄いクリーム色の  
つりがね形の花をつける



緑色の実が黒っぽく  
熟したら、食べごろ

世代を超えて引き継ぎたい  
地元の「ソウルフード」である

7月の風物詩と言えは「ハスカップ」。かつて、苫小牧東部地区の勇払原野に群生していた。実が食べごろになる初夏には、年に一度のこの季節を待ちかね、喜び勇んで摘み取りに出かけた。懐かしむ市民は少なくない。酸味が強い野趣あふれる実は、シロップや塩漬けとなって親しまれた。苫小牧市では、身近に存在したハスカップを「市の木の花」に指定している。市内の老舗菓子店ではハスカップジャムを豪勢にまとわせたロールカステラを看板銘菓とし、また、塩漬けの実を具にしたおむすびを定番メニューとする弁当店もある。ところが、いつしか気付くとハスカップの木の実は、厚真町をはじめとする、近郊の観光農園での収穫が一般的になっていった。

その一因としてあげられるのは、苫東地区を工業用地として造成する際に、昭和48年頃から大々的に行われた「移植保存」だ。工業基地に隣接する緑地帯はもとより、農協や市民の元へも数万本単位で「里子」に出され、野生の群生地はごくわずかなエリアに残るのみとなったのだ。当時、開発会社に勤務し、基地内の緑地保全に携わった草薙健さんは、今も現地のハスカップを見守り続けている。勇払原野の保全と利活用を行うNPO法人「苫東環境 commons」を設立し、植生の変化だけでなく人々の意識にも着目。「一時はブランド化され、商品が注目されましたが、工業開発のイメージと重なり、評価もマイナスに傾いたのは。市民の記憶や体験を掘り起こして記録し、地域の担い手を育て、新たに価値を高めていきたい」と語る。今年5月、同法人はハスカップをテーマにフォーラムを開催。果樹を研究する北海道大学准教授が「アントシアニンなど機能性成分を有するハスカップは世界的に注目され、その遺伝子を保持する勇払原野は重要な自然遺産」と絶賛した。草薙さんは「ハスカップについて多方面から語り合ったのは初めて。新時代の始まりだと思えます」と今後の展開に手応えを感じている。

原生ハスカップがひっそり現存  
勇払原野は世界的な自然遺産